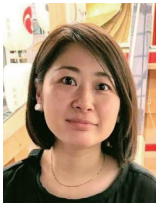


第3回「健康ってなあに？：ヘルスとウェルビーイングの原点を探る」



大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻(2021年度入学予定)

森本 早紀

大学時代に医療人類学、国際保健に興味を持つ。卒業後、看護師として病院等で勤務し来年度より大阪大学大学院人間科学研究科に入学予定。

ヘルスとウェルビーイング

1948年のWHO憲章の前文で初めて、「ヘルス」と「ウェルビーイング」について述べられました。それから72年、COVID-19によって社会と個人の変革が求められる今、もう一度ヘルスとウェルビーイングについて考えていく必要があるのではないかと思います。

今回はまず『等身大のわたし』からみたヘルスとウェルビーイング』と題し熊谷晋一郎さんにご登壇いただきました。周りからも自分からも理解しにくい苦勞を抱えた当事者による「等身大のわたし」を探求する当事者研究とウェルビーイングの関係についてお話いただきました。自分の努力で変えられる部分と変えられない部分を分析し理解した、わたしだけの「からだ」と、わたしだけの「物語」が、「わたし」を形作っています。自分の身体を調教するのではなく、それを認めた上での社会変革が重要であるとされました。そして、自分だけの「物語」には類似した仲間の存在が必要となります。具体的なエピソード記憶と抽象的な概念的自己の2つで形作られるわたしの「物語」は自伝的記憶と呼ばれます。様々な状態により自分のエピソードを誰とも分かち合えない時、この具体的記憶と抽象的記憶が統合されにくい状態に陥ります。仲間同士で経験を分かち合い、語り合える場を持つことで自伝的記憶を紡ぎ、それぞれのウェルビーイングに近付いていきます。また、自伝的記憶はウェルビーイングだけでなく連帯、実践理性、創造

・想像力に深く関わっているということをお話いただきました【図1】。ウェルビーイングとは等身大の「わたし」すなわち、等身大の「からだ」と等身大の「物語」を築き上げることであり、そのためには仲間が必要であると結論付けられました。

次に『医療人類学からみたヘルスとウェルビーイング』と題し、池田光穂さんにご登壇いただきました。医療人類学という枠組みから考えた課題の一つとして、ワクチン開発への期待のように医薬品への依存やドラッグの利用が個人や社会そのものを病気にしている現象があります。人々が気に病むことで実際に病気になるのではないかとした上で、グローバルヘルムリダクションの必要性を訴えられました。また、以前から指摘されていた様々な問題がCOVID-19の流行により背景化されてしまっていることも課題の一つであるとされました。COVID-19の蔓延によって、遠隔医療が必要視されています。僻地に住む人々とどのようにコ

ミュニケーションをとり、どのように健康格差を縮小するのかについても課題となっていると話されました。特定の地域やコミュニティに関する知識や世界中のデータ比較ができること、多角的な研究方法などがグローバルヘルスに対する医療人類学の強みであると語っていただきました。

改めて問い直す ウェルビーイングとは

パネルディスカッションではお二人の話題提供を受け、ウェルビーイングにおける等身大の自分と他者との連帯や仲間の重要性、人間のもつ潜在能力をどう伸ばしていくのかというディスカッションが行われました。池田さんがウェルビーイングの日本語訳を「それなりにハッピー」と提案されたように、100%の幸福を追い求めるのではなく、等身大のわたしと社会について、様々な観点から考えていきたいと感じています。

Buckner, R. L., & Carroll, D. C. Self-projection and the brain. Trends in Cognitive Sciences, 11, 49-57, 2007

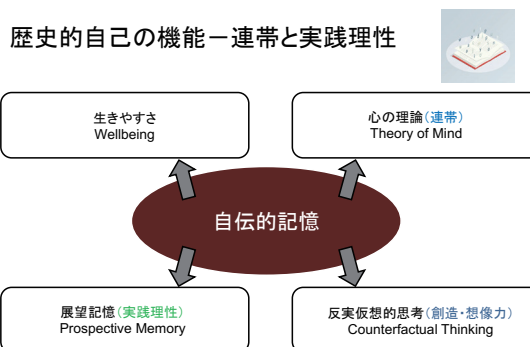


図1 歴史的自己の機能(熊谷さんの資料から)